

urban typhoon architecture

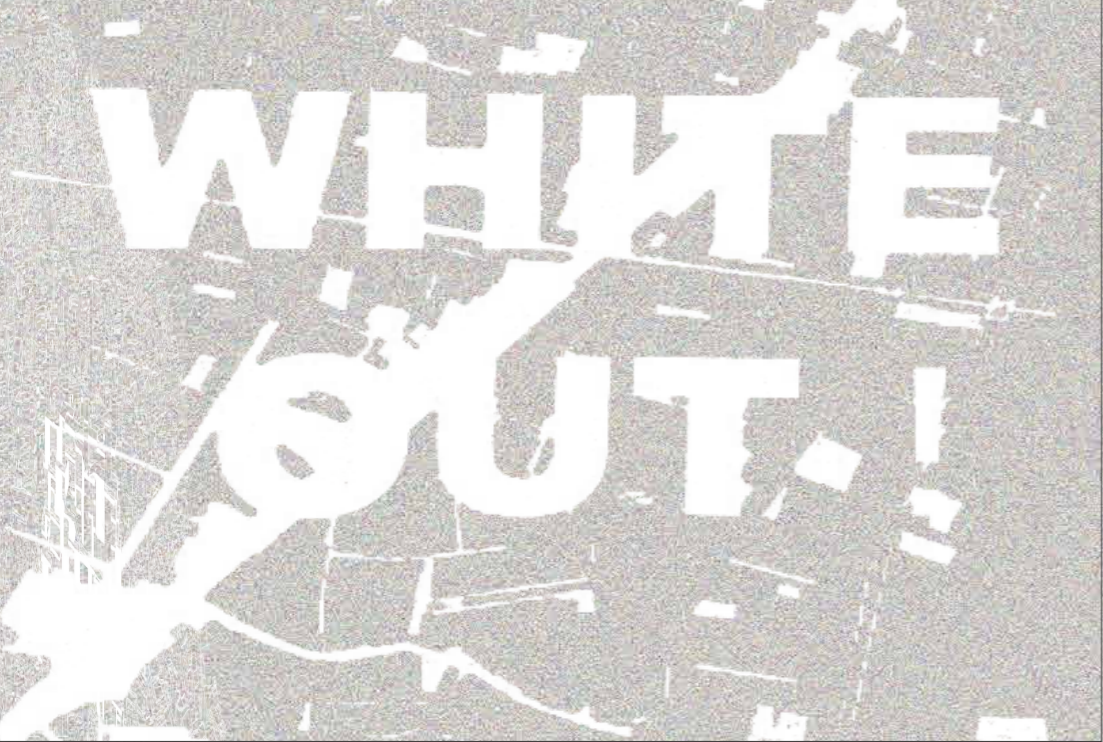
アーバン・タイフーン・アーキテクチャ

世田谷区下北沢駅前再開発事業に関する「公」と「私」の共生



00 アーバン・タイフーン・ワークショップ

さて、再開発の対立が行われている最中、下北沢ではアーバンタイフーンワークショップが行われた。その中で下北沢駅周辺の路上に無断でテーブルを立て、ウィングラスで乾杯するまで誰も静止しに来なかった場所を地図上に白く塗りつぶしていくという実験が行われた。調査員自身も「危険な試みであった」と発言しているが、このような実験を可能にさせたところに下北沢が持つ「特有の公共性」が隠されているのではないかと、下北沢には公（公共空間）における私（個人）の自由な振る舞いが許容されており、そのような点に着目して本研究を始める。



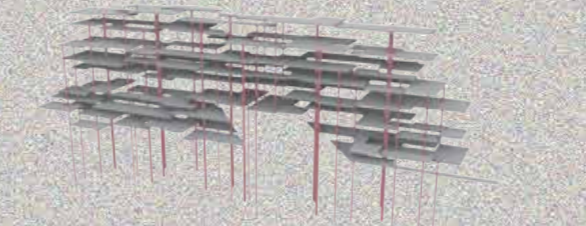
01 公園（スパイラルパーク）が軸となる複合施設

従来の複合施設では、商業の周りに公園が付随しているものが主流である。そこで本提案では、**スパイラルパーク**と名付けた公園が上下を繋ぐ主要動線を作り、その周りを商業がまわりつく形態としている



提案

05 フラットボイドスラブ



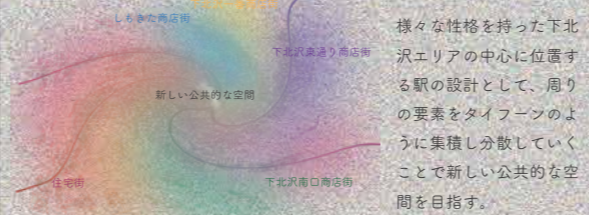
アンジュレーションスラブには、効率的にスパン可能な板厚450mmのRCボイド付きフラットスラブ構造を採用し、φ400mmからφ1000mmの柱で全体を支えることで、段階的にずれたアンジュレーションスラブを強調させると共に、従気のような力強さを表している。

08 コラボを誘発するアンジュレーションスラブ



従来は壁によって隔っていた店舗同士の関係をスラブのレベル差で仕切ったアンジュレーションスラブを採用することで、平面的なつながりが生まれ、ボイドやボックスの挿入が、断面的な繋がりも生むことで、コラボレーションや、コミュニケーションを誘発することとなる。

02 下北沢の微地形と連なるスパイラルパーク



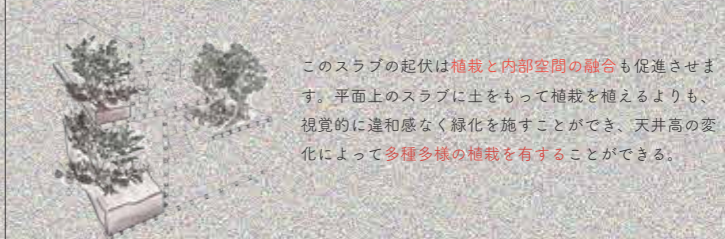
様々な性格を持った下北沢エリアの中心に位置する駅の設計として、周りの要素をタイフーンのように集積し分散していくことで新しい公共的な空間を目指す。

06 下北沢の微地形と連なるスパイラルパーク



スパイラルパークは、下北沢の微地形を延長するように挿入し、上昇気流のように上階へと繋いでいくことで、どこにいても常に外部との関係がある構成を作り出している

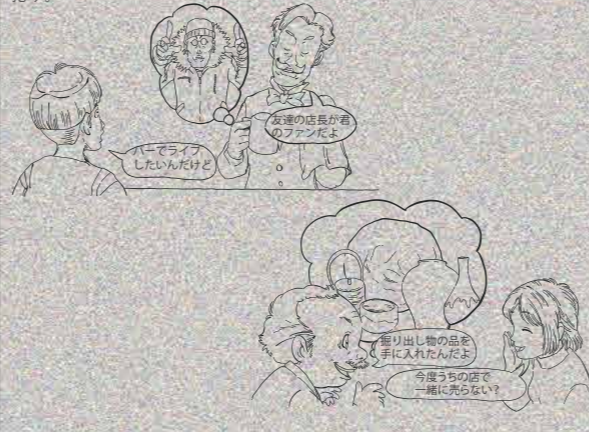
09 断面詳細



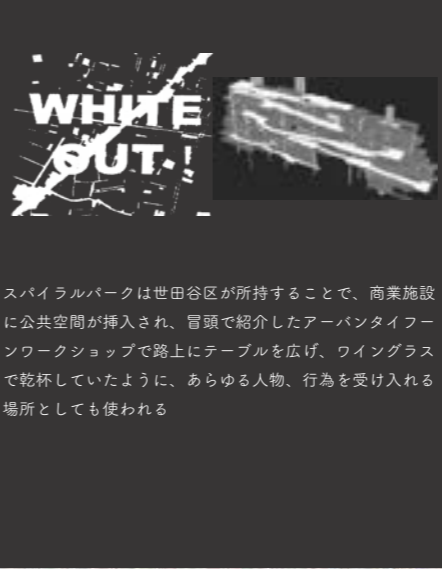
このスラブの起伏は植栽と内部空間の融合も促進させます。平面上のスラブに土をもって植栽を植えるよりも、視覚的に違和感なく緑化を施すことができ、天井高の変化によって多種多様な植栽を有することができる。

03 新たな文化の発信地となる駅施設へ

下北沢の特徴でもある、ファッション、サブカルチャー、グルメなどの店舗を配置した後、下北沢が持ち得ない、スポーツ施設、保育所、ギャラリー、ドックランを混在するように挿入することで、異文化同士のコミュニケーション、コラボレーションを誘発し、新たな文化を発信していく拠点となることを目指す。

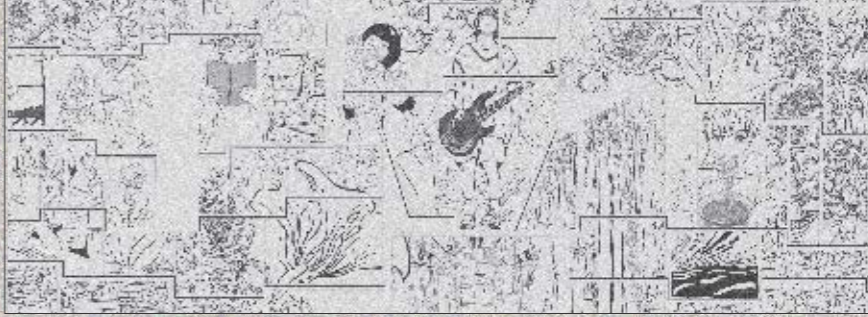


07 スパイラルパークの要素



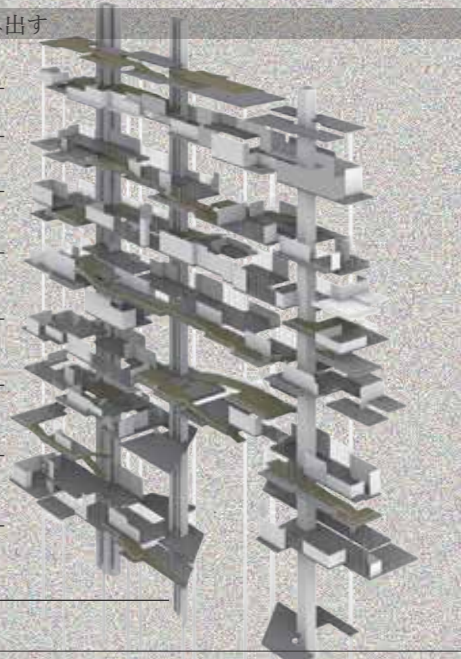
スパイラルパークは世田谷区が所持することで、商業施設に公共空間が挿入され、冒頭で紹介したアーバンタイフーンワークショップで路上にテーブルを広げ、ウィングラスで乾杯していたように、あらゆる人物、行為を受け入れる場所としても使われる

10 多様な視線、動線を作り出す

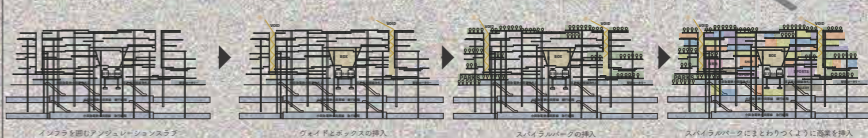


11 文化の積層が新たな文化を生み出す

- テニスコート スケボーパーク SHOP
- Park SHOP
- ライブハウス Park SHOP
- 保育所 SHOP
- 劇場 SHOP
- 猫カフェ SHOP
- ドックラン Park
- バスケット SHOP
- インフォメーション キャンプ



12 断面計画



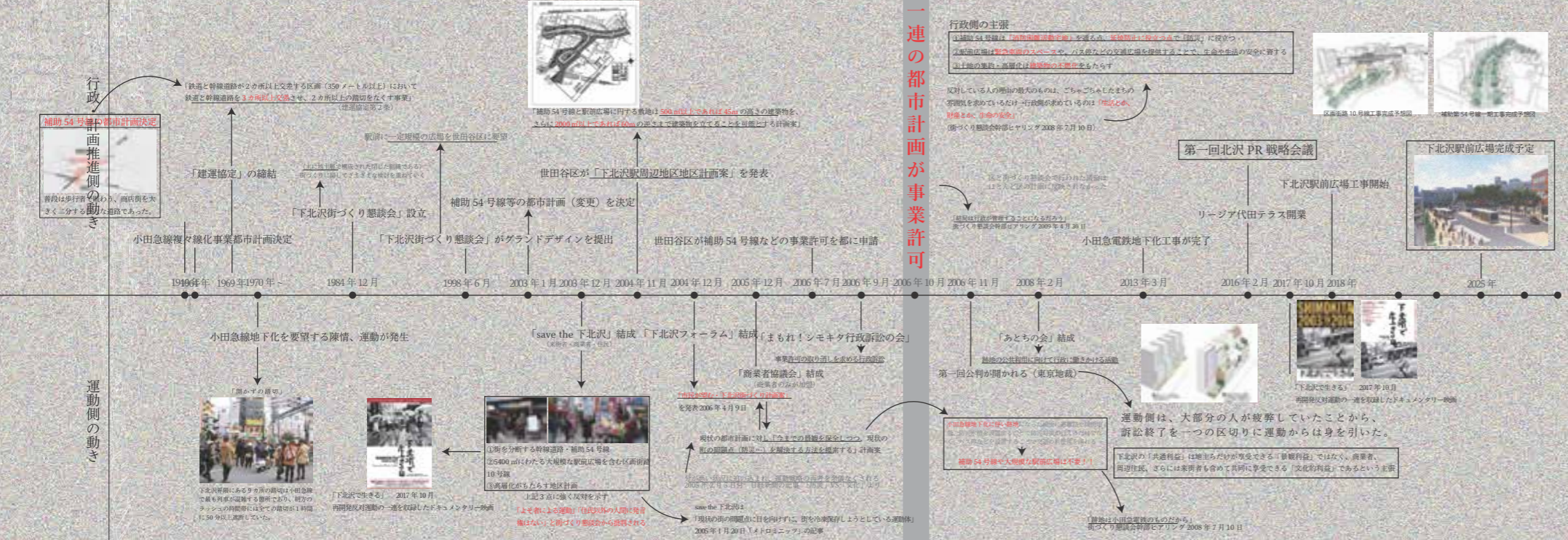
スラブが積み重なることで立体的な空間構成を創出し、上下階で見られる関係性を作り出し、スラブが近づけばコミュニケーションが、遠のけば大空間が作り出される。

再開発に伴う方針のずれが生じている「推進派」「反対派」

近年、リスクヘッジや利便性を重視した再開発によって、市街地が長い歴史の中で形成してきた文化や街並みが脅かされているケースも少なくない。東京都世田谷区、下北沢地区においては、駅前バスロータリー（区画街路第10号線）と、幅26mの道路（補助第54号線）が建設中であり、再開発「推進派」「反対派」両者の対立が生まれていた。反対派は、「小田急線地下化に伴い跡地になった場所に避難路や緩衝地帯、防災水槽を設置することで防災対策が行えるだけでなく、バス停などを設置することで交通の利便性を図れる」と区画街路第10号線と補助第54号線の必要性に意義を申し立てた。他にも反対派は「Save the 下北沢」や「下北沢フォーラム」「まもれ！シモキタ行政訴訟の会」など組織を形成し、行政の方針に意義を申し立ててきたが、結果的に反対派の意見はほとんど通ることがなく、一連の再開発事業に事業許可が降りた。

この対立では、「行政の方針」と「民間の理想」にずれが生じており、公と私との関係がはっきり分かれている。そこで本研究・設計では、行政と民間の対立関係を調和した「公」と「私」が共存した新しい公共性を提案することを目的とする。

一連の都市計画が事業許可



行政側の主張
 補助第54号線は「高層ビル建物を容れ、歩行者・自転車・車に寄りつた駅前広場は歩行者専用レーンや、バス優先の交通広場を確保することで、生命や生活の安全に資する。土地の集約・高層化は高層化の弊害をもたらす」

反対している人の中には「最大のものは、ごちゃごちゃしたまじりの空間を求めていただけ行政側が求めているのは「ゆとり、ゆとり、ゆとり」の空間だ」と主張する人もいた（2006年7月10日）

私とつながる懇談会が行われたのは11月12日（2006年11月12日）

「save the 下北沢」は「下北沢の文化を壊さない」という目的で、現在の市街地の保全（復元）を提案する方法を提案する計画案を発表2006年4月9日

「あとの会」結成
 地域の公共空間に、行政・民間が関与する

第一回公開が開かれる（東京地裁）

「下北沢で生きる」2017年10月
 高層化反対運動の一端を記録したドキュメンタリー映画

運動側は、大部分の人が放棄していたことから、訴訟終了を一つの区切りとして運動からは身を引いた。

「下北沢の「共通性」は地味だが享受できる「景観利益」ではなく、商業者・周辺住民、さらには来客者も含めて長年に享受できる「文化利益」であるという主張

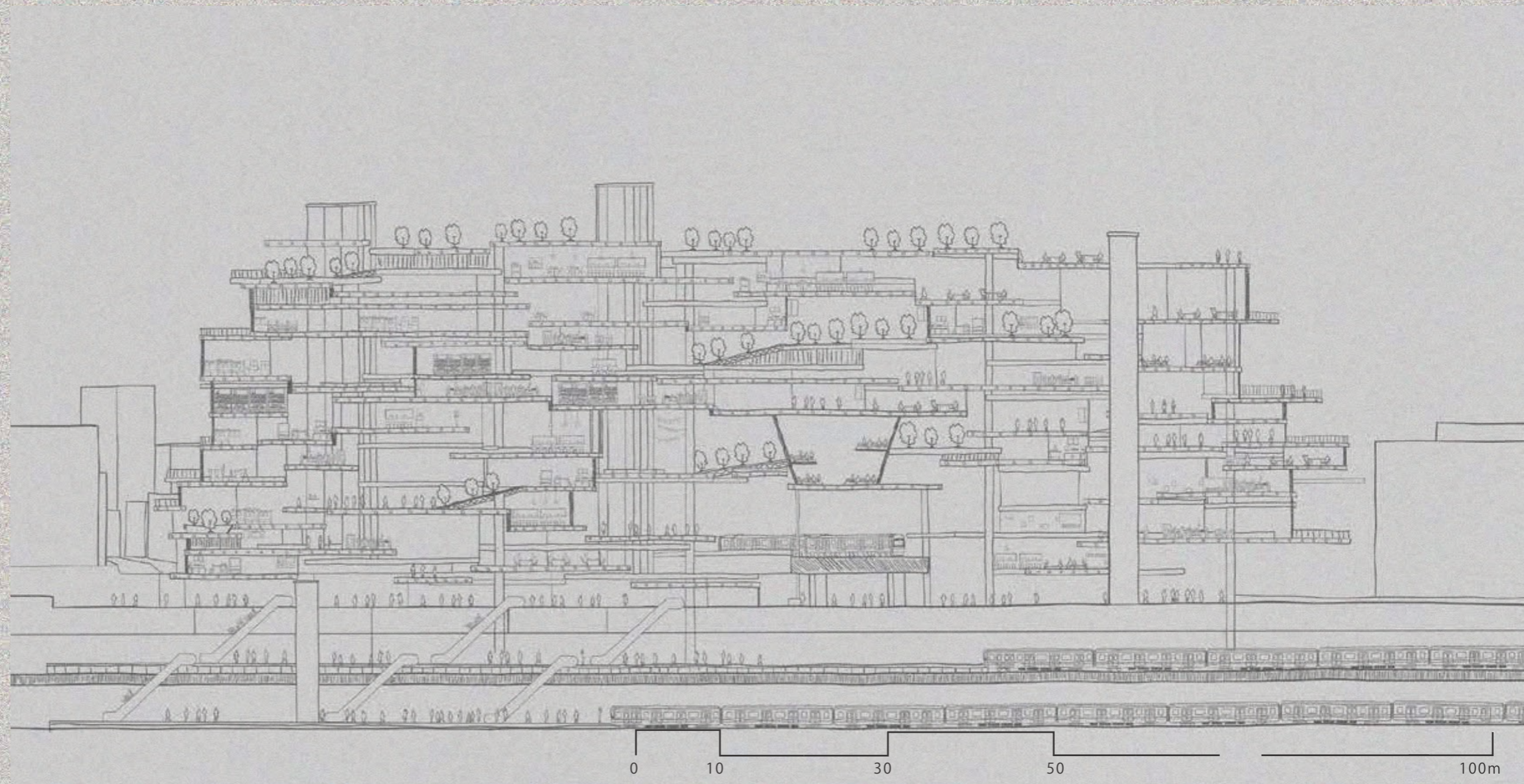
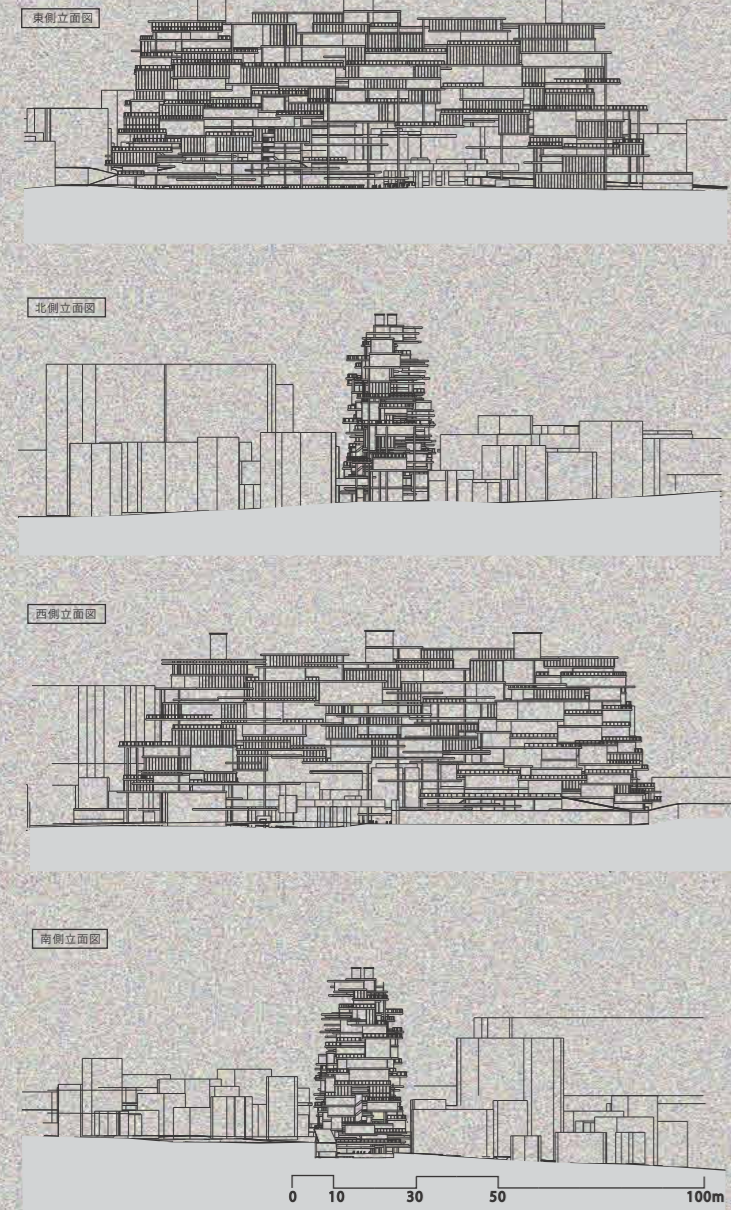
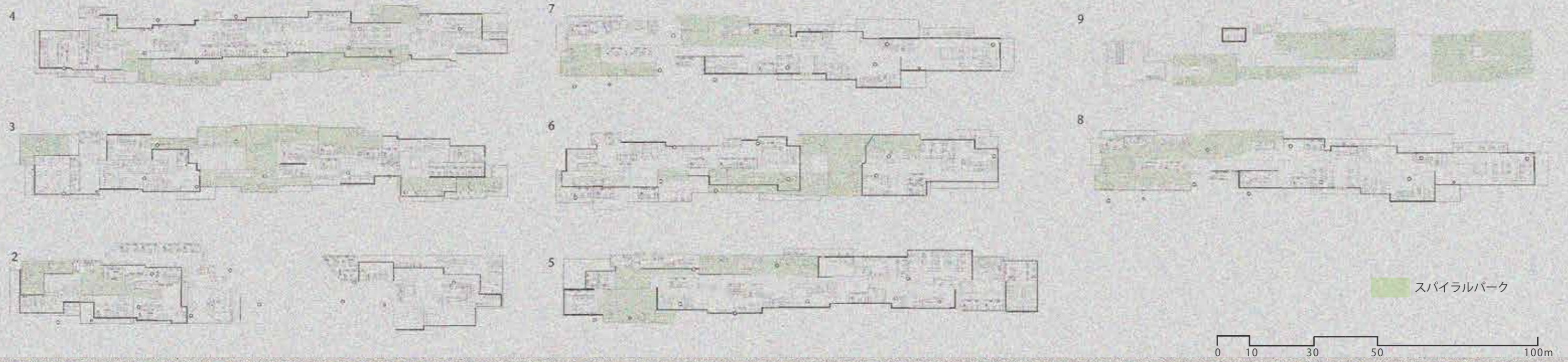
「建設小田急線地下化のしるし」2008年7月10日
 建設小田急線地下化のしるし

「下北沢で生きる」2017年10月
 高層化反対運動の一端を記録したドキュメンタリー映画

「あとの会」結成
 地域の公共空間に、行政・民間が関与する

「save the 下北沢」は「下北沢の文化を壊さない」という目的で、現在の市街地の保全（復元）を提案する方法を提案する計画案を発表2006年4月9日

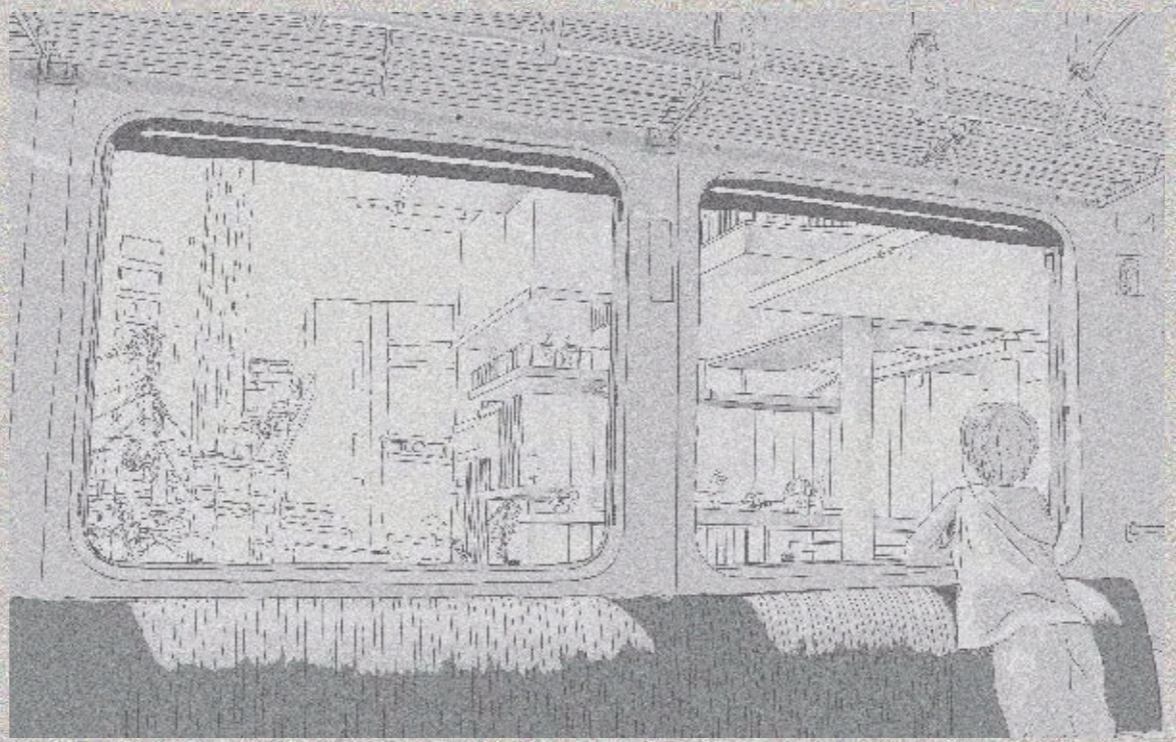
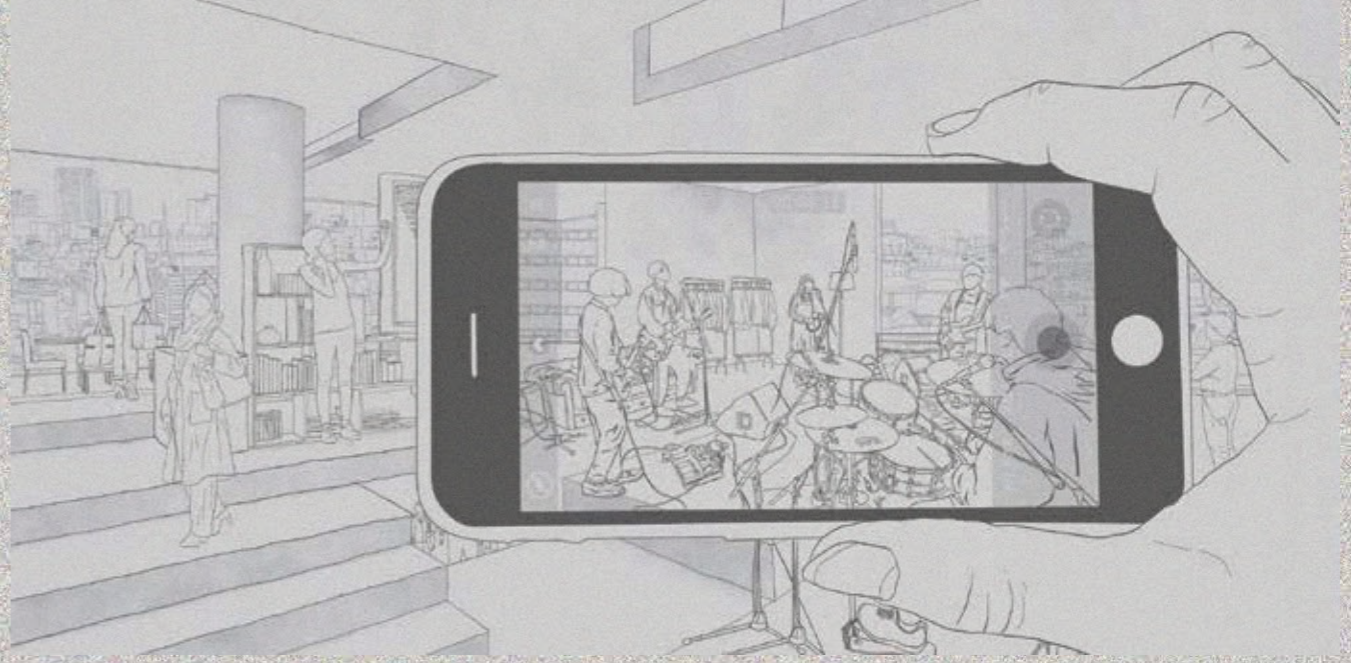
「あとの会」結成
 地域の公共空間に、行政・民間が関与する





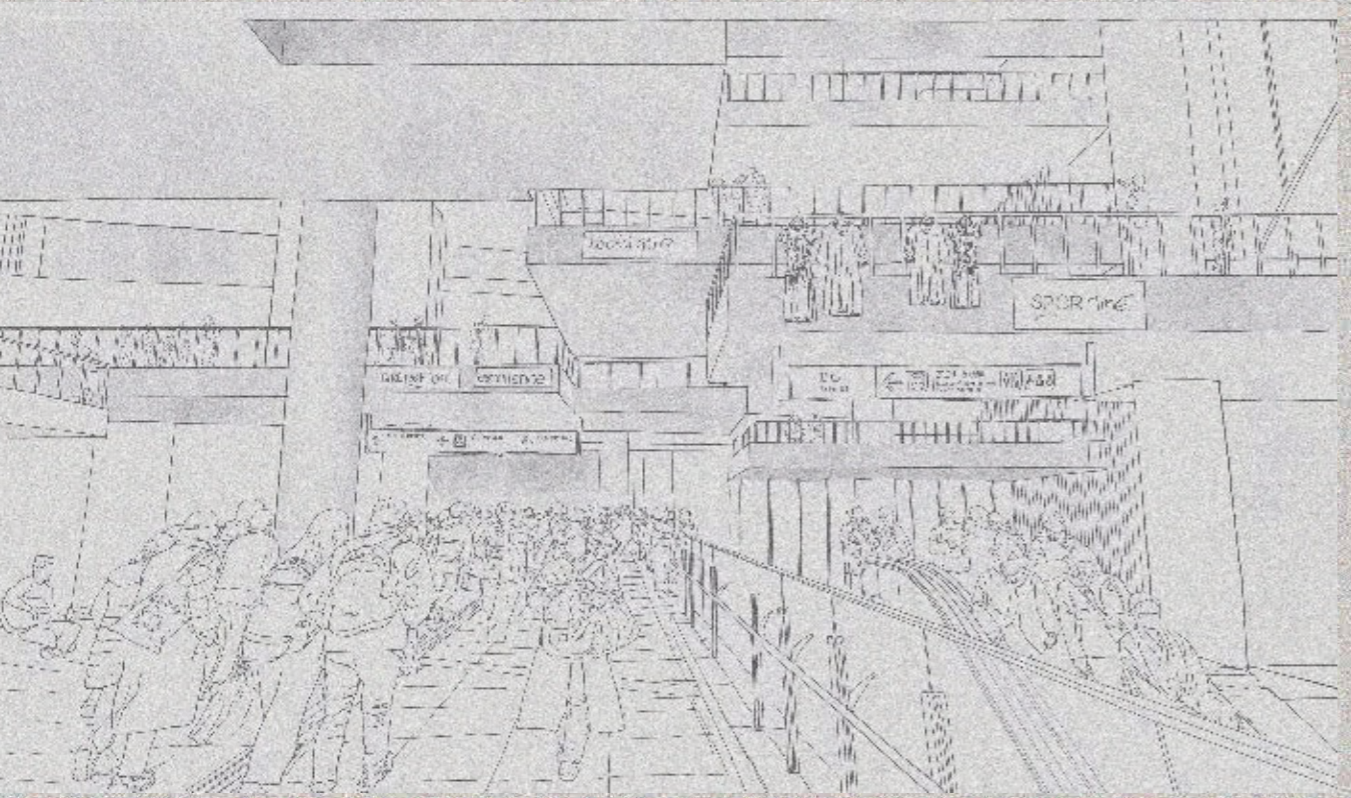
南口商店街から眺める
複雑に路地が入り組んだ下北沢のランドマークとなる

「スパイラルパーク」の使用例▶
「スパイラルパーク」の一部ではアーティストによるケリライブが行われている。このスパイラルパークの周りには、古着屋、レコードやがあり、交友関係の深いバンドメンバーが古着屋に衣装のレンタルを頼んだり、レコード屋にSEをかけてもらうなど、ポップアップ的に開かれるイベントをきっかけに、異文化同士のコミュニケーション、コラボレーションが生まれる



◀京玉井の頭線から建築を見る
線路の効果に対して、大きく開かれたスラブは人々の活動を車窓に映し出し、下北沢駅で下車しない人でも新しい下北沢駅を感じることができる

▼イメージ断面
シモキタらしさをただ追求するのではなく、文化の発信地として、これからも魅力的な街であり続けるために、「公」と「私」がタイフーンのように集積しあい、拡散していく運動体のような建築を目指している



◀小田急線改札内
アンジュレーションスラブの積み重なりにより、ホームを降りるとすぐに人の活動が垣間見える

